

の幟旗百十七本飾り建て、加賀屋大明神と染め込みたる大幟三本ありて、甚だ美觀なり。中の芝居は嵐吉三郎にて、看板出せしかどもいまだ初めず。誠に加賀屋歌右衛門は古今に一人なりと、日本中沙汰しけるとぞ。或は云ふ。其の頭俳人は梅室、相撲は阿武松、俳優は芝翫、三人とも金澤藩の出生にて、世人三傑と稱し、ひとしく美名を天下に著したるは、不思議なる事也といへり。

○覺源寺前

改作所舊記に載せたる天和三年十一月算用場よりの書出に、覺源寺町とあり。又元祿十四年六月川除奉行の上申書に、犀川覺源寺前川除之續きに前々者田地有之故、定檢地奉行支配致し、御納戸銀を以て川除出來之處、其以來金澤町方より家建致し、今程田地無之云々。とありて、此地邊は往古は法島村の村地なりしかど、犀川洪水の爲に中頃河原と成りしを、更に築出し町地となしたり。故に三箇屋版の六用集に、覺源寺の所付を法嶋河原と載せたり。

○覺源寺裏門町

小倉日記に、享保十九年三月五日金澤覺源寺前出火、家二

百七十軒許焼失とし、變異記に、寛延四年四月八日犀川川上新町覺源寺裏門町下方出火、十九軒焼失とあり。今此の町名絶えたりしかど、門前地に對し寺の尻地をば裏門町とは呼びたるなるべし。

○法性山覺源寺

(寺)

浮土宗也。天明六年の由來書に云ふ。當時開基慶安三年專譽傳建立。寺地七百歩。但し地子銀年中八拾二匁七分、當山門前・持山等無之。人數僧二人下男一人。と記載し、寶嶋川原覺源寺。とあり。三州志來因概覽に、覺源寺は天明五年に住持破戒、寺及破却。とあれど此は誤也。一書に、天明六年五月覺源寺住職女犯破戒の罪に依りて、公事場に入牢し、遂に牢中に死し、寺破却命ぜられたり。但し本寺よりの願に依りて、寺號は其儘本寺へ預けらる。とあり。さて此の後寺地は覺源寺跡とて芦原と成り、地内に覺源庵と號し、淨土宗の庵堂を建て地蔵を安置し、尼の庵室となし來りける處、明治慶藩置縣の際再建を申立て、遂に許可を得て一寺となし、即ち覺源寺と號し、寺院再建せしかど、明治十四年十二月自火焼亡せり。依之同十八年に川上新町

へ轉地して小庵を再建し、覺源寺の寺號を連綿せしむ。或は曰ふ。今の法然寺の本堂は、そのかみ覺源寺破却せし頃、覺源寺の建物をば移し、法然寺の建物となしたり。兩寺とも淨土宗にて同組なる故也といへり。

○土川除

延寶の金澤圖に、今いふ川上新町の上、藤棚の邊より犀川の河中に川除の形を描き、上川除と記載す。是今の川縁なる堤防なるべし。改作所舊記に載せたる、元祿十四年五月上野村十右衛門より川除奉行への願書に、石川郡笠舞村領續覺源寺前より上町川除之前通、先年御郡川除有之處、右之内七拾間程之間川付寄崩れ、今程此所川除より内町家に罷成り、笠舞村田地に構無之間、向後町川除御支配罷成様被仰付可被下。とあり。

○油瀨木

覺源寺舊寺地の尻地なる川除に水戸口を付け、犀川より用水を取れり。此の水戸口をば古來油瀨木と呼べり。此の用水は玄蕃川と稱し、下流は百姓町へ出で、鱒町にて倉月用水へ合し、油車へ出づるなり。舊傳に云ふ。昔油屋源兵衛

といふ者、今いふ油車の地に初めて水車を取立て、燈油を製造す。其の頃倉月用水のみにては水勢強からず、水車の廻りあしきとて、更に犀川の水をせき入れたしとの願にて、水戸口を付け用水を取りたり。油車の爲にせきたる水戸口なるにより、世人油瀨木と呼べり。その用水をも源兵衛川と俗稱せしを、後人呼び誤つて玄蕃川と呼べりと云ふ。按ずるに、油車の地に水車を設け、水碓を建て、燈油を製造し初めたるは、正保年中の事にて、水車を創立せしは油屋與助といふものなり。是今堅町に油商賣する多田源兵衛が先祖なり。油瀨木は實に源兵衛が祖先與助の、水戸口を付け川水をせき入れたるがゆゑに、後々までも多田氏より水戸口の掃除をなし來れりといへり。

○藤棚成福寺門前

成福寺は山伏にて、藤棚白山社の別當なり。此の門前地なりしゆゑに、藤棚成福寺門前と呼びたりしかど、今は藤棚とのみ呼べり。

○河上長壽人事略

金澤町會所留記に、藤棚成福寺門前越中屋廻しげ母まき、